

今回の講義テーマは“ヴェルサイユ宮殿と庭園” ～バロックからロココへ～

講師:大阪大学名誉教授 和田 章男先生

日時:7月26日(月)10:10～12:10



レジュメ

- ①ブルボン王朝の宮殿
- ②ヴェルサイユ宮殿の建築と庭園
- ③ルイ14世と太陽神話
- ④ルイ14世神話の創出
- ⑤ロココ文化の時代
- ⑥バロック芸術とロココ芸術の比較
- ⑦ロココ芸術
- ⑧ロココ絵画
- ⑨まとめ—貴族社会から市民社会へ



この宮殿を、訪れた方も、たくさんおられるでしょう、豪華な建物と、
広大な庭が有名ですね。

ちなみに、パリ南西 22 キロ。パリから小一時間ほどで到着します。

私は、二度訪問。



本日の和田先生の講義が私の過去の訪問を鮮明に思い出させました。記述させていただきます。

初回は、連れまわしツアー。

限られた時間の中、バタバタと、宮殿内部をガイドさんの案内で見学。

印象に残ったのは、部屋数の多さと、王が使用したという便器。

これは、有名な話ですが、

王侯貴族の華やかなりし頃、この宮殿で舞踏会が開催されても、トイレが少なかったため、皆さん便器
を持参し、庭園のあちこちにポイ。このため、悪臭が漂っていたとか。

息をのむのは、壁一面が鏡に張り巡らされた鏡の間。

窓からは、地平線が見えるような、広大な庭の景色を一望。

天井は、「シャルル・ルブラン」が描いた天井画と細かな細工をほどこしたシャンデリア。豪華の一言。

この部屋は西向きです。

17面の大窓から、真っ赤な夕陽が、窓と対をなす大鏡に、映し出される。

想像するだけでも、すばらしい光景です。

ただ、このツアーでは、庭園は見学できず、噴水周辺を、散策した程度。

次の訪問は、個人旅行。

時間の制約は、ないものの、ツアーのように、スムーズには入れず、

宮殿前正面広場のゴツゴツした石の上で、暑い中、長時間並んでの入場でした。

宮殿内を、はしょって見学。

今回は、庭園を巡回するプチトランに乗車し、時間をかけて、じっくり見学しました。

駐車場は、大トリアノンに、小トリアノン、大運河。それぞれで降車し、ランチ休憩も。

そもそも、東京ドームが220個に相当する、広大な庭園を、歩いて巡るなんて、土台無理な話。

仮に、自転車で巡るにしても、まるで森の一部を切り取ったような通路。目的地に到着できず迷子になるはず。

ここは、フランス式庭園。四角に刈り込まれた植木が左右対称に配置され、その間には直線的な道。

これらが見事なまで綺麗に手入れされていて、その美しさとスケールには、感動しました。

最後に、とても印象に残っているのが、庭園の芝生が、きれいな場所で、フランス人

カップルが、シートの上に座り、かたわらのバスケットには、フランスパンとワインボトルが、収まっていたシーン。まるで、絵葉書の世界のようでした。

【寛ぐ】って、こんなことなんやと、羨ましかったことを、今でも覚えています。

さて、和田先生の講義で、ヴェルサイユ宮殿に関して、いろいろと学びましたが、そのうち、お一つを、皆さまに紹介しましょう。

「宮殿を建設したルイ14世は、彼自身を太陽と重ね合わせていて、それを具体化するため、この宮殿で太陽神話のテーマを表現していた」ことです。

彼の居室部分は、広間が月、衛兵の間が火星、控えの間が水星、寝室が太陽、閣議の間が木星、小寝室が土星、広間が金星という七つの部屋から成り、それぞれの部屋には、太陽神アポロンを中心に、古代の神々が壁や天井に描がかれ、また、庭園の二つの泉水とグロツトという洞窟風の東屋に置かれた像は、太陽神の誕生、昇る太陽、沈む太陽という、太陽の軌跡を意味している。

このように、宮殿内部と庭園において、壮大な太陽神話が演出されていたことを、初めて知りました。

むすび

庭園には運河があります。しかし、周辺は、水の便が悪いため、パリから水道橋で、この地まで、運んだとか。また、ルイ14世は、気に入った仕上げになるまで、何度も、工事をやり直させたとか。

それほどの贅をつくした宮殿の建設は、国家財政に大きな負担を強いるはず。

結果、財源確保のしわ寄せは一般大衆が、重税にあえぐことに、

その不満が、フランス革命に、つながったのは、歴史の流れとして当然のことかと思うところ。